



世界仏教文化研究センター設立記念 Hiroshima Peace Memorial

ヒロシマ被爆 70 年追悼 特別上映

「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」

❖ 日 本 語 概 要 ❖

開会挨拶：赤松徹真氏（龍谷大学長、文学部教授）

時 間：10：45～10：55

はじめに、赤松徹真学長より開幕の挨拶をいただいた。「1945 年 8 月 6 日 8 時 15 分に広島に原爆が投下され、多くの人々が犠牲になった。その年の死者数は 14 万人にもものぼった。また、1945 年 8 月 9 日の長崎の原爆投下によって、その年に約 7 万人の死没者があり、現在もその被爆者の悲しみや苦しみは続いている。実は、ここ京都も他人ごとではなかった。京都の梅小路車庫も原爆投下場所の一候補地と想定されていたことが記録されているからである。21 世紀の世界は今、善と悪との二項対立的な構造になりつつある。今後、そうした二極対立的な考え方を越えて、仏教的な視点から世界平和を構築していく道を考えていくことが必要であるだろう。そのためにも、2015 年に第五次長期計画のもとで、世界仏教研究センターが設立された。世界仏教文化研究センターは、仏教伝来の歴史と経論釈の文献を読解する基礎研究部門、仏教を機軸とした国際交流を進めるプラットフォームとしての国際研究部門、さらには現代世界のさまざまな苦悩の解決に向き合い、その課題解決に取り組む応用研究部門の三部門から、その成果を広く世界に発信していくという重要な役割を担っている。本日の特別上映会『知られざるヒロシマの真実と原爆の実態』は、応用研究部門の人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターによって企画実現したものである。このドキュメンタリー映画をご覧いただき、広島への原爆投下がどのような「現実」であったのかを、しっかりと共に学びたい。ご尽力いただいた映画監督ならびに関係各位に感謝申し上げたい」というメッセージを聴衆に届けた。

【映画監督 田邊雅章氏 プロフィール】

ヒロシマ 70 プロジェクト代表

1937 年、原爆ドームのすぐ東隣に生まれる。8 歳の時、原爆に遭い、二日後に入市被爆した。両親と弟が犠牲となり、現在もその遺骨は世界文化遺産「原爆ドーム」の敷地内に

埋まったままである。15 歳で記録映画監督を志し一筋に生きている。日大芸術学部映画科卒。還暦を機に史上初の爆心地復元事業に取り組み、17 年をかけて 6 作品を完成した。広島と国連上映などで大きな反響があった。広島市民賞、広島文化賞を受賞し、政府非核特使として活躍している。著書『原爆が消した広島』など。2015 年 5 月にニューヨークの国連本部などで英語版が上映された時、スタンディングオベーションで拍手に包まれた。関西で上映するのは、今回、龍谷大学が初めてである。

映 画：「知られざるヒロシマの真実と原爆の実態」

時 間：11：00～12：02

❖ 映 画 の 概 要 ❖

原爆投下—あの日から 70 年。CG によって復元された田邊監督の在りし日の生家からは、産業奨励館がすぐ近くに見えていた。監督は、子供の頃、この館でよく遊んでいたという。被爆以前と直後を知る田邊監督は、数少ない生き証人として、その惨劇を語ることが、自分の使命であると語る。そして映画監督として、この地の「復元事業」に取り組むことは、自分の責務であるとも言う。

映画の中では、原爆が投下された時の惨劇が、現在ご存命の被爆者の方々によって、多く語られている。焼けただれた人々が防火水槽に飛び込む様子や、助けを呼ぶ声、体中真っ赤にやけどし髪の毛がすべて逆立っている女性の姿、降り注ぐ黒い雨……、凄惨を極める状況を、ある被爆者の方は「この世の地獄」と表現していた。

田邊監督は、被爆前の広島の街の様子を、CG を用いて再現している。CG によって、和やかな人々の暮らしや賑わう繁華街の様子が、生き生きと甦っていた。一方で、本編を通じて、このような街を一瞬にして消滅させる原爆の恐ろしさを改めて思い知らされた。消滅し、破壊されるのは、街だけではない。そこに息づいていた地域の芸能や歴史、伝統、子どもたちの遊びも失われた。

広島は、川とともに栄えてきた。運搬用の舟が行き交い、またそこは子どもたちの良き遊び場でもあった。憩いと風情の象徴であった広島川。被爆後 1 年経った夏の日、田邊少年は、この川に飛び込んでみた。川底には、犠牲になった多くの遺骸があったという。

当時広島の花街で働いていた人々の内、1,000 人以上が犠牲になったが、それは記録に残っていない。また陸軍病院に来ていた見舞いの人々など外来者も多く犠牲になったが、それは「行方不明者」として扱われている。記録はすべて焼き尽くされてしまい、その犠牲者の全容を把握することはできないのが現状なのである。

学童疎開をしていた子どもたちは、「いつか両親が迎えに来てくれる」と信じて待ち続けた。しかし、そのまま農家に引き取られる子どもや浮浪児になる子どもが多くいた。「原爆

孤児」は現在「原爆孤老」となっていることも多いという。原爆による人体への影響は大きく、生き残ったとしても、やけどの跡(ケロイド)が残り、また癌になる確率も高く、そのせいで結婚なども困難になったという。

今でも、平和公園の樹木の下には、粉末状になった遺骨が眠っている。「戦争は悪、原爆は絶対悪」。私たちは、決して“あの日”を忘れてはならない。

対 談： 田邊雅章氏×鍋島直樹氏（龍谷大学世界仏教文化研究センター副センター長）

謝 辞： 戸田栄信氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科臨床宗教師）

黒瀬英世氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科臨床宗教師）

花束贈呈： 井上睦美氏（龍谷大学文学部真宗学科三回生）

笠井景子氏（龍谷大学文学部真宗学科三回生）

時 間： 12：05～12：25

❖ 対 談 の 概 要 ❖

映画上映後、田邊雅章映画監督と聞き手の人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター一長、鍋島直樹先生による対談が行われた。鍋島先生から「ご両親と弟を原爆で一瞬にして亡くされた悲しみは今もとても深いと思われる。その悲しみの中で、ヒロシマの美しい街並みと被爆の現実を再現する映画が17年もかけてようやく完成したことに心からありがとうございますと伝えたい。監督がこの作品を通じて伝えたいことは？」と語りかけた。田邊監督は「表現者として、作品がすべて。自分自身の体験に置き換えて考えて欲しい」と述べられた。また、鍋島先生から「悲しみや憎しみ、悔しさを感じておられた日々の中で、なぜ憎しみに憎しみを返そうとしなかったのか？」と語りかけた。田邊監督は、「被爆直後は、大切な両親と弟を失い、子ども心に「いつか仇をとろう」と考えたこともあった。しかし、自分にはこの世ですべきことがあるはずと思い、映画を志した。このヒロシマ原爆の映画を製作する時に、多くのアメリカ人が協力してくれた。長い時を経て、憎しみに対して憎しみを返すのではなく、ヒロシマ被爆の映画製作を通じて悲しみを表現し、憎しみを平和への道を築いていきたいと思った。孤児の自分を受け止めてくれた寺院があった。自分にはこの世ですべきことがあるはず、それに向かってどのように生きればよいかについて教えてくれたのは仏様だった。亡くなった両親や弟のお墓にお参りし、仏様に手を合わす中で、憎しみに憎しみを返してはならないと思った。アメリカ人も同じ人間であると思えるようになった」と語った。

最後に、鍋島先生から田邊監督へ、親鸞聖人の教えである「^{おんしんびやうどう}怨親平等」と書かれた色紙がプレゼントされた。「怨親平等とは、恨み敵対した者も 親しい人も、偏見を離れてみれば同じ人間、同朋であることを意味する」と鍋島先生から説明されると、その言葉が田邊

監督の平和への気持ちと思い重なって、両手でしっかり受け止めてくださった。

次に、本学学生を代表して、龍谷大学大学院実践真宗学研究科の臨床宗教師である戸田栄信さんと黒瀬英世さんが謝辞を述べた。戸田栄信さんは、「田邊監督のおかげで、ヒロシマ原爆の真実をはじめて身近に感じることができた。これからこのヒロシマ被爆の真実を宗教者としてしっかり受け止めて平和を伝えていきたい」と述べた。黒瀬英世さんは「臨床宗教師研修で鍋島先生と共に広島平和記念公園を歩いた時、この下には数えきれないたくさんの方々の遺骨が眠っていると聞いた。田邊監督のおかげで、ヒロシマの被爆前の美しい街並みや人々の幸せを知り、同時に、原爆の恐ろしさや悲しみを痛切に感じた。この気持ちを伝えていきたい」と感謝の気持ちを込めて話した。最後に、文学部真宗学科 3 回の井上睦美さん、笠井景子さんから、田邊監督へ花束が手渡された。田邊監督は、その学生たちの謝辞を聞いて喜んでくださり、歩み寄って学生たちと熱い握手を交わした。

終わりに、鍋島先生より、この特別上映会のためにご尽力いただいた龍谷大学社会学部教授、新田光子先生、ならびに、参加してくださった仏教の思想担当者の野呂先生、能美先生、佐々木大悟先生、高田文英先生と学生、文学部教義学特殊講義 A の学生、人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター副センター長の黒川雅代子先生、来聴者、スタッフ全員に感謝の気持ちを伝えた。

田邊監督は鍋島先生にも握手を求めた。その時、会場から感謝を込めた拍手がわきおこった。平和への想いが確かに教員や学生たちに伝わった。

❖ 感 想 ❖

被爆者による壮絶な証言からは、悲しみとともに原爆そして戦争の本当の恐ろしさが伝わってきた。一方、被爆前の広島の街の様子の「復元作業」は、そこに生まれ育った映画監督・田邊雅章氏にしかできない仕事であると感じた。同時に、この作業には、相当なつらさが伴うものだったのであろうと推察された。在りし日の生家や遊び場を思い出すことは、被爆直後の惨状を思い出すことにもつながる、精神的にも大変苦しい作業だったのであろう。それをご自身の責務だと捉え活動する田邊監督に、敬意と感謝の意を表さずにはいられない。また、この映画を通じて、改めて平和と命の尊さについて深慮することができた。

以上

(文責：鍋島直樹、唐澤太輔)